

正しい知識で身を守ろう

言えない。AMラジオには50%ほど離れた雷からの雑音が入ってくるので、雑音の頻度や大きさも参考になる。

全国の気象台の雷日数(雷を観測した日数)の平年値を見ると、年間の雷日数がもっとも多いのは、金沢の42・4日である。月別の雷日数を見ると、宇都宮のような内陸部では夏に多く、金沢のような日本海側の地方では冬に多い(気象庁ホームページ)。八戸の年間の雷日数は9・1日と全国でも少ない方である。しかし、県南の夏は短く、梅雨明けと同時にさまざまにイベントが企画されるだろう。そして、この時期に雷も発生しやすい。

雷から身を守るには正しい知識を身に付けなくてはならない。この機会に勘違いしていないか確認してみよう。

1 高い木の下は安全か？
雷は高い場所に落ちやすいので、側に立っている人に直接落雷(直撃雷)することはない。しかし、木の幹や枝から飛んでくる(側撃雷)可能性があるのか、かえって危険である。日本電気学会のホームページによると、落雷による死亡原因は、開けた平地に立っていた場合が最も多く、次が木の下で雨宿りしていた場合である。この二つが

全落雷死の半数以上を占める。
2 身に付いている金属を捨てた方が良いか？ アクセサリーなどの金属を外しても変わらない。木製のバットも金属バットも雷にとっては同じ導体なので、頭より上に掲げてはならない。雷鳴が聞こえたら雨が降っていても傘をささない方がよい。野球のバット、テニスラケット、ゴルフのクラブ、釣り竿などはすぐに手放すべきである。
3 車の中は安全か？ 周りに何も無い時は車に逃げるのが

私見創見 Sunday

落雷



三浦 和彦

東京理科大学教授

最善であるが、周囲に建物があればその中に避難する方がよい。落雷が激しい嵐の中では、しばしば竜巻などの突風も発生し、車は横転する可能性がある。
4 建物の中は安全か？ 基
5 稲光から雷鳴までの時間は何秒あったら安全か？ 音は

みうら・かずひこ
1955年、八戸市生まれ。2014年から現職。日本電気学会副会長、NPO法人富士山測候所理事、東京理科大学教授、東京理科大学理事。

本的には安全である。ただし、その建物や近くに落雷があった時は、電灯線・電話線や水道管などを伝わって雷の高電圧が建物内に侵入し、近くにいる人が感電することがある。そのため、窓や電化製品から1m以上離れた方がよい。また、激しい

海・山に出掛ける時は、前もって気象情報に十分注意する。学校行事、公共の野外活動、屋外イベントを企画する時は、主催者は気象情報会社に情報提供を依頼する、あるいはリアルタイムの雷雲情報を携帯電話で検索するなど情報の収集を行うべきである。雷雲の接近が予想されたら、速やかに中断して避難させた方がよい。屋外の落雷事故で責任を問われることもある。日本電気学会のホームページによると、30分間雷鳴が聞こえなくなったら、中断した屋外行事を再開してもよいとのことである。その場合でも、各種メディアで気象情報を入力し、周囲に雷雲がないか、接近する雷雲がないかを確認すべきである。
落雷は天災であり人間の力で制御できるものではないが、正しい知識を身に付け避難するなどの方法により、人的被害を防ぐことはできる。イベントの主催者は安全を第一に考えていた